

Title	ドイツ語の”意味変遷”の概観
Author(s)	熊谷, 俊次
Citation	大阪外国語大学学報. 6 p.75-p.89
Issue Date	1958-04-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80136
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ドイツ語の „意味変遷“ の概観

熊 谷 俊 次

Überblick über den Bedeutungswandel deutscher Wörter

Shunji Kumagai

Wenn wir, von früheren Zeiten absehend, die Literatur der deutschen klassischen Zeit betrachten, und sei es auch nur die von der Mitte des 18. Jahrhunderts bis Anfang des 19. Jahrhunderts, so werden wir überall auf einen vom heutigen Sinn abweichenden Sinn der Wörter, d. i. auf einen Bedeutungswandel stoßen.

Manches damalige Wort hat eine andere Bedeutung als heute. Manche mögen denken, daß die deutsche Sprache des 18. Jahrhunderts noch genau dieselbe wie die jetzige sei.

Der Wort- und Formenschatz ist ja wohl ungefähr der gleiche. Aber was vielfach abweicht, ist eben die Bedeutung. Diese Abweichungen sind zwar oft nicht sehr stark, aber gerade die geringfügigen Verschiedenheiten verändern den Sinn des Satzes.

Den Sinn des Satzes richtig zu erfassen ist die Hauptaufgabe und der Hauptzweck unsres Deutsch-Studiums. Aber nicht immer ist leicht, jedesmal die dem Sinn des betreffenden Satzes entsprechende richtige Bedeutung aus den verschiedenen möglichen Bedeutungen zu erfassen.

In dieser Hinsicht ist der Bedeutungswandel ein beträchtliches Hindernis, welches wir unter allen Umständen zu überwinden trachten müssen, um der deutschen Sprache völlig mächtig zu werden.

Auch haben wir in Japan bis jetzt keine deutsch-japanischen Wörterbücher, die den Bedeutungswandel der Wörter so erklären, wie dies etwa Paul's Deutsches Wörterbuch in Deutschland tut.

Auch irren wir bisweilen bei der Wahl der Bedeutungen, die im deutsch-japanischen Wörterbuch gegeben sind, und ergreifen womöglich die unrichtige. Diesen Fehler zu vermeiden, ist den Deutsch Studierenden eine sorgfältige Kenntnis des Bedeutungs-

wandels von großem Nutzen.

Dieser Gesichtspunkt leitet mich, im folgenden einige Hauptpunkte, den Bedeutungswandel deutscher Wörter betreffend, kurz zu nennen und den Deutsch Studierenden damit einen Weg zum Verstehen der Art und des Wesens des Bedeutungswandels zu weisen.

- I. Beziehungen zwischen Laut und Bedeutung
 - i. Bedeutungswandel in gleicher Lautgestalt
 - ii. Veränderung der Lautgestalt ohne Bedeutungswandel
 - iii. Lautgestalt geht parallel mit Bedeutungswandel
- II. a) Partieller Bedeutungswandel. Totaler Bedeutungswandel
 - b) Einmaliger, individueller Bedeutungswandel
 - Mehrmaliger, genereller Bedeutungswandel
- III. a) Allgemeine Bedeutung, zufällige Bedeutung
 - b) Verwirrung der Bedeutung
- IV. Bedeutungswandel deutscher Wörter. Gruppen:
 - A. Bedeutungswandel innerhalb desselben Begriffsgebiets
 - a) Verengerung der Bedeutung
 - a') Verschlechterung der Bedeutung
 - a'') Verbesserung der Bedeutung
 - b) Erweiterung der Bedeutung
 - B. Bedeutungswandel unter Übergang in ein andres Begriffsgebiets
 - a) Metapher
 - b) Metonymie

ドイツ文学史上, 古い時代はさておいて Goethe, Schiller などの大詩人によって花やかに代表されたドイツ古典主義時代の文学作品に眼を向けるなら, それは現代との時間的隔りは大したものではなく, ほんの18世紀半から19世紀の初めにかけてであっても, われわれは各所に現今とは異なった語の意味に, すなわち意味変遷の事実に出会うであらう。

多くの当時の語は現今と異なった意味を持っている。18世紀のドイツ語は現代のそれとまだ正確に同一のものであると思うひとびともあらう。もちろん語彙, 詞論はほぼおなじである。しかし幾重にも変っているものはそれこそ語の意味である。これらの意味変遷はなるほどしばしば少し強い程度のものでないが, それでもこのささいな意味変遷こそ文の意義を変える。

文の意義は精密に正しく、語の意味は言語感覚上、微妙なニュアンスにまではいって理解することがわれわれのドイツ語学研究の主要課題であり、また主要目的でもある。しかし当該の文の意義に適応した正確な語の意味を多種多様な意味から毎度的確に把握することはかならずしも容易ではない。

この点、意味変遷はドイツ語の完全な征服のため是が非でも努力して克服せねばならない大きな障害の一つであらう。

この障壁につき当たりながら、およそ Hermann Paul の Deutsches Wörterbuch がドイツにおいて役割を果たしている如く、語の意味変遷を説明した独和辞典は今のところわが国には見当らない始末である。われわれは実際、独和辞典に示された訳語の取捨選択に往々まどうわされ、ややもすると適切な意味をつかみそこなっている。この誤謬をさけるためおおいに役立つものは無論、意味変遷の綿密な知識そのものである。

この観点からここにドイツ語に関しての意味変遷の広汎な範囲を要約的に若干の主要点にしばらくあげ、これを解説して意味変遷の仕方と本質の理解のための道しるべにしたいと思う。

なお語の意味およびその変遷は従来二つの面から取り扱われた。一は普遍的問題を相手にする心理学的立場から、他は多分に具体的事実から追究する言語学的立場からである。前者の代表者は Wundt であり、后者のそれは H. Paul であった。ここでは主として言語学的見地から取り扱うことにする。

Faust.	Mein schönes Fräulein, darf ich wagen, Meinen Arm und Geleit Ihr anzutragen?
ファウスト.	美しいお嬢さん、おしつかけましいですが、 腕をお貸し申してお送り仕りましょうか。
Margarete.	Bin weder Fräulein, weder schön, Kann ungeleitet nach Hause gehn.
マルガレーテ.	わたくしはお嬢さんでもなく、美しくもございません、 ひとりで家へ帰れます。

〔Fräulein は現今の „adliges Fräulein“ の意味であった〕

Das Mädēl, das ich meīne, lacht, (Bürger)
わが愛する娘は笑っている。

〔meīnen は現今の „lieben“ の意味であり、„Minne“ に関連している〕

略字：	ahd.	古期高地ドイツ語	got.	ゴート語
	deut.	ドイツ語	lat.	ラテン語
	engl.	英語	mhd.	中期高地ドイツ語
	franz.	フランス語	nhd.	近期高地ドイツ語

同一の語が他の語とつながって用いられるとき、すっかり異なった意味を持つことは周知のことである。一例として Scheibe [円形の板, 円盤] を挙げる。比較: Drehscheibe [回転盤]。Scheibe は現代では概して Glasscheibe [板ガラス] として用いられる。Scheibe の形, 用途はまちまちであってよい。円形でない物にまで用いられる。住宅の通常の Fensterscheibe [窓ガラス], Schaufensterscheibe [陳列窓ガラス], Spiegelscheibe [鏡のガラス] から水栓に水の洩れぬようはめられる Gummischeibe [ゴム座], さらに eine Scheibe Brot, Melone [ひときれのパン, メロン], また Mondscheibe [月の輪], Radscheibe [円盤形輪体] などといわれる。Mondscheibe, Radscheibe の Scheibe には本来の意味, すなわち [円, 円形の物] なる意味がまだ保存されている。Glasscheibe の意味は中世紀に用いられた Butzenscheibe [中央部が隆起している色づき円窓ガラス] を想起するなら明白になるであらう。従って文化史の変遷が問題になる。むしろ意味変遷は文化の発展, 風習の変化, 自然の影響等に関係がある。しかも言語の一生はもともと動的であり, 意味の変遷は静止することなく, その限界は予測されない広範囲のものである。

I 語の音と語の意味との関係

語の音価値 (Lautwert) は, 語の意味が変わったか, 狭められたか, または広げられたか, いずれの場合においても全く変化なしにそのままで存続することができる。音の変化 (Lautwandel) の場合, 通例古い音形態は消滅するが, 意味の変遷の際には本来の意味に新しいそれが相ならんで存続できる。両方の意味の存続は正常な事実ですらある。

音形態の変化は意味の変遷と決して必然的に結びついていない。これはまったくひろく言語一般にあてはまることであり, 高度に発達した段階に立つ言語の音形態とその意味との間にはなんら強制的つながりは存在しない。

i. 音形態は同一でありながら意味を異にする語がある。イタリア語の caldo [heiß, warm 暖い] に対して, これとほとんど同音のドイツ語の kalt [寒い] は反対の意味である。比較: 英語 eventually とドイツ語 eventuell.

ii. 音形態はおおいに変化した意味の変遷は認められない多くの語が存在する。

lat. pater franz. père got. fadar deut. Vater engl. father

ahd. mhd. および方言の hûs は nhd. 文語の Haus と意味はおなじである。

iii. 音形態の変化が意味の変遷と平行しているものがある。Atem〔息, 呼吸〕と Odem. 前者は肉体的な意味で, 中部ドイツ語から, 后者は宗教的なそれで低地ドイツ語から転用されている。Bett〔ベット〕と Beet〔苗床, 花壇〕。Bett (ahd. bet(t)i) は当初には現今の Beet の意味をも持っていたのが, Beet なる語が17世紀に中部ドイツ語に出現したのである。Beet は一格と従属格との方言においての分裂を土台にして, (got. badi. [Bett]. 二格. badjis. 三格. badja. すなわち中性, 単数の一格: -i. 二格: -jis) Bett から別れると同時に意味も変ったものと見なされている。このような同一語幹の語の意味の相違は同一言語の種々な方言から採り入れられた語に多く見出される。

Reiter (乗馬者), Ritter^{ナイト}〔騎士〕の両語はともに動詞 reiten から由来している。前者は高地ドイツ語において発生し (mhd. rîter), それ対して后者はフランドル語 (Flämisch) において発生して低地ドイツ語の地域で用いられていたのが, 騎士的文化の普及につれて高地ドイツ語へ導き入れられたものである。Reiter 対 Ritter の関係に似ているものは Schneider〔裁断師〕対 Schnitter〔草刈人〕であり, Rabe〔鴉〕対 Rappe〔青毛馬〕の関係は Knabe〔男児〕対 Knappe〔小姓〕のそれである。二重子音の形はそれぞれ語幹の最後の単子音が二重子音になったものである (参照: Sogenannte westgermanische Konsonantendehnung)。これらの語は根原的にはおなじ意味であったものが, nhd. 時代の初期に特殊な意味を持つにいたった。

他国語が種々な音形態で数回借用された際にも, しばしばこの意味変遷の事実が生じている。直接的か間接的かいずれにせよ, lat. palatium〔パラティノの丘〕から由来している Pfalz, Palas(t), Palais の意味を比較するがよい。franz. chose〔物〕は lat. causa〔原因〕をはやくに借用したものである。しかしこの causa が後に cause〔原因〕として改めてフランス語にとり入れられた。なお cause は〔原因〕の他に〔訴訟〕なる意味をも持っている。

II a) 部分的意味変遷. 全体的意味変遷

上記の Beet 対 Bett の関係から察知されることは, 意味の分割が意味変遷の重要な現象の一つになっていることである。語の根原の意味は保持されているが, これから第二次的意味が分割されるとき, これは部分的意味変遷と呼ばれる。語の根原の意味は消滅し, 新しい意味のみが存続するとき, これは全体的意味変遷といわれる。これは特に抽象的意味の語において事実である。Eindruck〔印象〕。mhd. êndruc, ingesigel はともに具体的に捺印することであった。それか

らこの捺印の行為は神秘主義者 (Mystiker) によって彼等と神との融合, 神との合一の表象として用いられていたが, 最後に敬虔主義者 (Pietisten) によって18世紀にこの語は抽象的な (印象) として日常用語へ採り入れられた. ここにいたって根原的の具体的意味は消失してしまったのである.

b) 個体的意味変遷. 一般の意味変遷

なお, 一回の, 個体的意味変遷と数回の, 一般的それとが区別される.

前者は既存の語が一定の時代に, 一定の個人 (一国民であってもよい) によって任意に使用され, これが根原的意味となんらかの関連のある別の意味をあらわす場合である. ローマ人はローマの最初の造幣局を *Moneta* と呼んだ. これは造幣局が *Juno Moneta* を祭る寺院の傍に在ったからである. *Moneta* (=Mahnerin 警告者(女)) は女神 *Juno* のあだ名である. lat. *Moneta* はドイツ語の *Münze* (造幣局) となった. *Moneta* が造幣局の意味となったことはまったく偶然の場所的関連によったものである. また lat. *palatium* (*Palas(t)*, *Palais*) はすでに ahd. において *Pfalz* としてドイツ語へ借用されたが, この語は皇帝 *Nero* がローマのパラティノの丘の上に宮殿を新築した事実に基づいて宮殿の一般的名称となるにいたった. なお演劇関係者間で, *der Schauspieler habe so und so viele Vorhänge gehabt*. [あの俳優は幾枚も幕を持った] といわれる. これはその俳優が何度もアンコールをうけたことである. 幕はアンコールを意味し, 幕がアンコールされる毎にくりかえし上げられる事実からこの意味の変遷は生じた.

この個体的意味変遷に対するものが一般の意味変遷である. lat. *pecunia* (*Geld*) は *pecu* (*Vieh* 家畜) と関連があり, 古代の農民のもとでは動産は主として家畜の所有頭数をもってあらわされていたことから, [財産] の意味になっていた. ゲルマン語の領域においても got. *faíhu* は [家畜, 金銭, 財産], *faíhufriks* は [所有欲のある] という意味であった. この意味は英語の *fee* [礼金, 謝金] で最後の反響を見出している.

III a) 普遍の意味. 偶然的意味

語は普遍の意味と話者と聞き手の間にのみ通用する偶然的意味とを持つことができる. 普遍の意味とはある種属のすべての個体, 個物を総括した意味である. *Pferd* [馬], *Baum* [樹木], *Brot* [パン]. 普遍の意味は本来, 抽象的であり, 且さまざまであってもかまわない. これと反対に偶然的意味においての使用の場合, 話者と聞き手は特定の具体的なもののか, または特殊な表象を冠

詞もしくは代名詞をもってか、指示的品詞によってか、あるいは付加語を添えてあらわされる関係を注視する。dies Pferd, jener Baum, Weizenbrot [白パン]。

Fuchs [1)孤 2)栗毛馬 3)狡猾な人間 4)金貨 5)新入学生]の如く、普遍的意味での使用のさい、一つの語の意味がさまざまであってもよいことは上述のとおりであるが、偶然的意味においての使用の場合、Fuchs なる語においてはその一つの意味のみが目ざされる。

一つの語の意味がさまざまであることと区別されるものは、根原的には音形態を異にした語が言語発展の過程に音形態がおなじになってしまった事実である。Acht [注意] (mhd. ahte), Acht [迫放] (mhd. âhte), acht [8] (mhd. ahte; ahd. ahto)。

またおなじ音形態にして意味の異なる語がある。das Futter = 飼料, das Futter = 衣服の裏地, steuern = 納税する, steuern = 船, 自動車等を操縦する, 制止する。

他国語はある言語の語源をおなじうしている語の根原の意味からしばしばいちじるしく隔たるのを通常としている。英語の to ride はドイツ語の reiten と同一の語源で意味はおなじである。しかし to ride は現今では主としてドイツ語の fahren の意味で用いられる (to ride in a carriage, a bicycle, in a ship)。従って [移動する] というその部分的意味が一般化され、ドイツ語の reiten の意味は on horseback を付加して to ride on horseback で明白にされねばならない。ある言語の語の意味内容は他国語の対応する語のそれと完全にとは一致しないのが通例であるから、上例のように英語、ドイツ語なる同系語の語すらも別々に生きていくものである。このことから外国語の翻訳の困難が生じてくる。

さらに同一言語に属する語で、しかもその音形態はおなじであっても時代を異にすると、意味は完全に合致しているとはかぎらない。ドイツ語において mhd. liebe は nhd. Freude [喜び] を意味し, nhd. Liebe [愛] は mhd. においては minne をもってあらわされていたのである。

b) 意味の食い違い

子供はたとえば [ソファー] を [椅子] として, [梨] を [林檎] として, また [傘] を [杖] として表示するようなことがあるが、これは子供がものの特徴の一部分しかとらまえていないのに、これをもって全般的にあてはめようとするからである。このような食い違いは言語の幼年期においてもしばしば見出された。

たとえば樹木の名称において同一の樹木が時によって異なっている意味を持っていることもこの意味の食い違いのためである。

ドイツ語の Buche [ブナ], ラテン語の fagus に相応するギリシャ語の phegos は Steineiche [ヒヒラギ] の意味であった。またそのいちじるしい特徴は針状の葉である Nadelholz [針葉樹]

が Eiche [カシワ] をもっておなじように呼ばれるならこれもこの食い違いである。

なお言語史的に見て現今の意味の成立が辻つまの合っていないように見える語もある。

das Eisbein [アイス・バイン, 塩漬の豚の脚] は Eis [氷] とは関係はない。古ザクセン語およびデンマーク語の ísbêr が現今の Hüftknochen [腰骨] または Schambein [恥骨] であった。der Erlekönig [魔王] は Erle [ハンノキ] と無関係である。Herder がデンマークの譚詩の Elfenkönig [妖精の王] (elverkonge, ellerkonge) を誤ってドイツ語に移したもので、Goethe もこれを用いていた。

Flitterwochen [蜜月] は Flitter [金銀箔] とは関係なく、むしろ flittern [愛撫する] に関連している。

Flöten geh(e)n [失せる] は Flöte [笛] と関係なく、Lebewohl sagen [別れを告げる] に関連している。すなわち Valet sagen [告別する], valeten sagen, flöten gehn.

der Friedhof [墓地] は Friede [平和] と直接的には無関係であり、関連があるとしても、間接的であらう。Friedhof は迫害されたものがそこでいたわられた、従って Friede を見出した der umfriedete Platz [囲いのせられた場所] であった。die Kohlmeise [シジツカラ] は Kohl [キャベツ] と関係なく、むしろ Kohle [石炭] と関係がある（この小鳥の黒色の頭のため）。

die Mitgift [持参金] は現今の意味での Gift(das) [毒] とは無関係で、むしろ曾っての意味での Gift(die) [贈物] に関連している。そうでなければ das Mitgift といわれるであらう。

die Sündflut [大洪水, ノアの洪水] は Sünde [道徳的か宗教的の罪] と関係なく、むしろ古ゲルマン語および ahd. sin (groß, immerwährend) に関連していた。Sin vluot = Allgemeine Überschwemmung [一般的大洪水]。

IV ドイツ語の意味変遷の分類

本来の意味と変遷したものとを区別することは簡単である。変遷した意味がなおも本来の概念圏内にとどまっているか、それともそこにとどまっていないか、すなわち他の概念圏内へ転移したかに応じてさらに区分される。前者においては意味は a) 狭められているか、b) 広げられているか、換言するなら一般化されているかである。后者は転義 (Metapher) といわれる。意味の狭少、拡大はとに角として次の如く細別される。a) 意味は純思想的媒介を通じて他の概念圏内へ転移されているか、b) 二つの事物間に具体的関連があり、それに基いてその一つの語が他の意味を持たされているかである。a) は本来の純粋な Metapher である。b) は現今 Metonymie [意味のずれ] と呼ばれている。ただしここでは修辞上のいわゆる Metapher, Metonymie, Hyper-

bel (Übertreibung), Litotes (Verkleinerung) などには深く触れないことにする。

A. 本来の概念圏内での意味の変遷

a) 意味の狭少

意味の狭少とは、ある概念圏内の既存の一つの意味が強調され、前面へおし出され、漸次他の特徴、普遍的意味を排除したことである。当初にはなおも普遍的意味が狭められた意味と相ならんで存在している。これは大多数の語が両方の意味を持っていることから知られる如く、多くの語において現代にまでつづいている現象である。普遍的意味が完全に排除され、特殊な意味のみが残るときはじめてこの現象は終結したと見なされる。しかしかかる経過は勿論時日を要し、数世紀に及ぶものである。なお、たとえ経過は終了したかのように見えていても、個々の言い廻しに根原の意味が存在していることは注意すべきことである。arm の本来の意味は beklagenswert [悲しむべき], unglücklich [不幸な] であり、これは成句的な armer Sünder [悲しむべき罪人, 死刑囚], arme Seele [不幸な人], armer Teufel [可哀想な奴] などに保持されている。reich に対する arm の [貧しい] という意味は新しいものである。

意味の狭められた事実は豊富である。ただし極度に狭く意味が解されることは稀である。しかし多くの個人の許で意味が狭められ、若い世代によって保持される場合が生じている。

Frauenzimmer は根原的には [主婦が家人の女たちと一緒にいる部屋] の意味であったが、古典主義時代には [上流の婦人] (Frau, Dame) となり、現代では [卑しい女] (geringe Person, Dirne) と狭められている。厳密にいうならこれは意味の悪化である。Schirm は現代でもあらゆる種類の [保護] の意味で用いられる。比較: Ofenschirm [ストーブの防火ついたて], Lichtschirm [遮光器], Gottes Schirm [神の保護]。しかし無造作に Schirm といわれるときには, Regenschirm [雨傘], Sonnenschirm [日傘] の意味で解される。これは偶然の狭められた意味の方が支配的となり、話者には身近に感じられているからである。

Früchte といえば Obst [果物] と解される。しかし Frucht は実際には土地からのすべての収穫物を意味し、南ドイツでは Getreide [穀物] として通用している。比較: Fruchtmarkt [穀物市場], Fruchthalle [穀倉]。

Daß von Früchten nichts umkommt, nichts
zurückbleibt. Plündert rein aus und schnell. (Götz)

穀物は一粒も無駄にするな、
残しておくなよ、すっかり掠めてしまえ、速く。

Laden は通常, Verkaufsort in einem Hause [店] の意味である。Laden の本来の意味は

Brett [板] であった。比較: Fensterladen [窓の雨戸]。

なお, Bretter [板] を組み合わせて建てられた Verkaufsbuden [露店] から Markt [市場] へと発展している。

Gewehr は現今では Flinte [猟銃, 小銃] の意味であるが, 根原的には一切の防禦用の武器のことであった。比較: Seitengewehr [佩刀]。最も有効な武器はそれこそ Flinte であったため, Gewehr はこの意味へ狭められた。

a') 意味の悪化

意味の狭少の特にいちじるしい変種は, 多くの語において見られる意味の悪化である。当該の語をもって当初には賞讃または非難の副意味なしに一般的なことが表示されていたのが, それより一層よいものの強調のため新語がつくられたか, もしくは他の語が代りに用いられたことから, 主として当該の語の意味の悪化が生じている。

riechen [匂う, においがする] は一般的意味を持っている。es riecht gut [よいにおいがする] と es riecht schlecht [悪いにおいがする] とに区別される。gut riechen の代りに duften [芳香がする] が用いられるにいたって, 単に riechen なる語は schlechter Geruch [悪臭] の意味をあらわすようになった。従ってこれは stinken [悪臭を発す, 臭い] の意味とおなじである。

Frau, Fräulein は貴族階級の女性を示していた。フランス革命が階級的拘束を打破して以来, これに影響されてドイツにおいてもこれらの語が社会的に比較的上層の市民の家庭に用いられはじめた。この使用が流行するにつれて, それまで市民階級の女性のため用いられた Madam, Mamsell の意味は下落し, 今では特殊な用語に化している。すなわち Mamsell は田舎の女や旅館の台所で働く女に用いられる。

Fräulein なる語も „gnädiges Fräulein“ という言い廻しの普及のため俗化してしまった。現今ではやや上流の家庭では ein Fräulein を雇っている。

a'') 意味の改良

他面に意味の改良されているものもある。ここで問題になるものの多くは詩人の用語である。不潔な感じを与える語として日常生活において, もはや使用されなくなっていたものが詩人の用語中に保存され, 本来とかわって比較的品の良い意味で用いられているのである。

Dreck. 本来の意味は Exkrement [排泄物]。比較: Mäusedreck [鼠の糞]。これが緩和されて Unreinigkeit [不潔, 汚物] の意味に改められている。

Schelm. 本来の意味は Aas [腐肉]。偽瞞の人間に対する罵言であるが, 近代になってこれが緩和されて Schalk [ずるい男] の意味になっている。

b) 意味の拡大

子供や論理的に鋭く思考しない素朴な人間は一つの語にしばしば広汎な意味を与えるものである。自由に駆使できる語の貯えが僅少であればある程そのとおりである。それ故意味の拡大は子供の用語に多くあらわれ、大人の談話には見られないのが通常である。精神の円熟につれて識別能力が高まるからである。上記のことはとにかく諸国民の実生活に用いられている言語においてもあてはまる。

Gesinde の現今の意味は〔僕・婢〕であるが, mhd. sint は Weg〔道〕であり, 領主の出征のさし同道する従者, それから使用人一般を意味した。輕蔑的な〔下層民〕の意味には今日では Gesindel がこれにかわって用いられる。Gefährte〔旅を共にするひと〕, Genosse〔たのしみを共にするひと〕, Geselle〔居住を共にするひと〕は Gesinde に類似して一般化されている。現今では Gefährte, Geselle は Kamerad〔仲間〕, Genosse は Parteigenosse〔黨員〕の意味である。

Speicher の本来の意味は Kornkammer〔穀倉〕, それから〔商品の倉庫〕であるが, 南ドイツ, 西ドイツにおいては Bodenraum〔屋根裏の部屋〕の意味に用いられる。

Stube (engl. stove) の根原的意味は暖房設備, 特に入浴のための, それからこのような設備付の浴室 (Badestube), ついで暖房される部屋, 最後に Wohnraum〔居室〕へと一般化された。

Ding の根原的意味は Volksversammlung〔人民集会〕。比較: Dingstätte〔民会場〕。それから人民集会で論議されたもの, すなわち〔法的係争, 訴訟〕を意味し, 最後に一般化されて Gegenstand〔物〕をあらわしている。このことは Ding とおなじように根原的に〔訴訟事件〕を意味した Sache〔物〕と似ている。

形容詞 fertig は名詞 Fahrt から由来し, 先づ〔旅仕度をする〕の意味であった。比較: reisefertig。それから一般的に〔用意する〕という意味になっている。比較: bußfertig, dienstfertig, friedfertig, schlagfertig。

hurtig は mhd. hurt〔騎士の仕合で槍を突き出す〕であり, 17世紀までは〔攻撃の烈しさ〕の意味であったのが, 現今では〔速かな〕,〔敏捷な〕となっている。

動詞の意味の拡大も稀でない。

gehen の意味は先づ〔足で歩む〕ことであり, それからあらゆる〔移動する〕ことをあらわしている。

die Uhr geht.〔時計は動いている〕。der Zug geht ab.〔列車は発車する〕。比喩的にさえ用いられる。das geht ihm den ganzen Tag im Kopf herum.〔そのことが終日彼の頭の中を往来する〕。斯くして根原的意味から遠く隔り, 強調に用いられる副詞の用法も説明される。

副詞 sehr [非常に, 甚だ, 全く] の根原的意味は schmerzlich [痛い, 苦しい] である. 比較: versehen [傷つける].

sie ist arg verliebt. [彼女はひどく惚れている]. arg の根原的意味は schlimm [悪い] である.

sie ist schrecklich nett. [彼女はすばらしく可愛い].

er ist furchtbar dumm. [彼は あきれた 馬鹿者だ].

このように苦痛, 恐怖の感情を表現する語が強調の副詞としてしばしば用いられる.

B. 他の概念圏内へ転移による意味の変遷

a) 転義 (Metapher. Übertragung der Bedeutung)

意味の拡大のさいに, 語はその根原的意味から離脱してまったく他の意味に転移するという現象が起る. かかる転移は要するに語の一生において重要な役割を演じている.

この Metapher を惹起する根拠の一つに外形の類似があげられる. Birne [梨] → [電球]

外形の類似のため人体の一部分の名称から生物, 無生物の名称へ転じたもの: Kohlkopf [キャベツの頭], Nagelkopf [釘の頭], Pfauenauge [孔雀蝶], Bergrücken [山脊], Meerbusen [湾].

逆に自然界のものや人間の作品の名称から, 外形の類似のため人体の一部分の名称へ転じたもの: Tolle [前髪] = Dolde [繖形花], mhd. tolde [束状の花]; Becken [骨盤], Brustkorb [胸廓], Ellenbogen [肘], Hühneraugen [うおのめ], Krebs [癌], Zäpfchen [口蓋垂].

あるものの用途, 機能が他のもののそれとおなじ種類であるときも Metapher になる.

Feder [本来の意味は羽毛] は, 昔, 字を書くため Gänsekiel [鵞ペン] が使用されたので, これと用途をおなじくしているため Stahlfeder [ペン] に転義している. Horn [本来の意味は^{ツノ}角] は金管吹奏楽器に, Rohr [植物. ヨシ, アシ] は木製または金属製の空洞の管にそれぞれ意味が転じている. Blasrohr [吹矢の筒], Gasrohr [ガス管], Luftröhre [気管], Sprachrohr [メガホン].

また mhd. strâl=Pfeil [矢], Lichtstrahl, Sonnenstrahl [光線]. Homer は Sonnenstrahl を Apollo の射た矢として表示している.

言語発展の過程におびただしく多くの造語が Metapher によってできあがっている. 精神的現象をあらわす語の根原的意味は 具体的なものであった. たとえば begreifen [理解する] は本来, mit einem Griff umfassen [柄でつかむ] ことであり, 具体的な意味から発している. 名詞 Begriff を哲学者 Christian Wolf が18世紀の当初に [概念] として學術用語にとりいれた. これに類似して fassen, auffassen, erfassen, faßbar, Fassung などの意味も具体的から抽象的へと転じている. この種の Metapher の多くは中世紀の神秘主義に帰せられる. 神秘主義者の言語的特徴は好んで具体名詞から抽象名詞をつくりだしたことであった. Eindruck, Ausdruck

Darstellung, Darlegung, Auslegung はいずれもその例である。

やはり Metapher のもっとも重要な仕方は、具体的現象によつての精神的現象の表示である。抽象的な Zeit (時間) の名称は、大概、具体的な場所に関する語から採りあげられている。Zeitpunkt, Zeitraum, eine Spanne Zeit, Zeitabschnitt; die graue Ferne = das graue Altertum (大昔)。

um, nach, vor はもともと場所に関してのみ用いられたが、その後、時および原因、結果等の関係の表示に用いられるようになった。

副詞が〔所〕,〔時〕,〔方法〕,〔原因〕,〔結果〕等の順序で、〔所〕の副詞が先づ呼ばれるのもこれに基いているのであらう。

b) 意味のずれ (Metonymie. Bedeutungsverschiebungen)

Metonymie は Metapher に近い現象である。上例の Münze, Pfalz はそれぞれ固有名詞からの Metonymie の例である。

Metonymie は場所的、時間的および因果的関連によつて生じている。極めて簡単な Metonymie は代表的な一つの特徴が全体の表示として用いられる場合である。der Junggeselle gründet sich einen eigenen Herd. (独身者が世帯を持つ)。曾って家の中心であり、神聖視された Herd (かまど) が家全体をあらわしている。mein Herz (わが心臓) = eine geliebte Person (愛人), dem Liebhaber die Hand der Tochter geben (求婚者に娘の手を与える, すなわち求婚に応ずる), beschränkter Mensch (偏狭な人間) = Dummkopf (馬鹿者)。Flegel は罵言として、盲目的にから卒をたたきつける農夫を意味し、それから grober Kerl (野人) なる一般の意味となった。

1) 場所的 関 連

i. 若干の衣類の名称: Kragen (カラー) は mhd. krage (頸)。従つて頸にまとわれる (カラー) である。Bein (ズボンの脚部)。Rücken (上衣の背)。

ii. あるひとの必携の品がそのひとを表示する。Besen (箒) = Dienstmädchen (女中)。Knie-riem (靴工の踏張革) = Schuster (靴屋)。Pflasterkasten (膏藥箱) = Apotheker (薬剤師), Arzt (医者)。

iii. ひとびとのとどまっている場所がそのひとびとを表示する。der kaiserliche Hof (宮廷—廷臣)。das Abgeordnetenhaus (衆議院—代議士)。der Gerichtshof (法廷—裁判官)。die Tafelrunde (円卓—食卓仲間)。

2) 時間的 関 連

Mahlzeit (食事)。本来は食事の時刻である。それからその時間に食べられるものをあらわす。

Messe [年の市] は Messe [ミサ] と同一語である。昔はしばしば教会の儀式に大売り出しや市^{イチ}が結びついて催されたから Jahrmarkt [年の市] の意味となった。

3) 因果的關係

Zunge [舌] = Sprache [言語]。

Steuer [税]。本来の意味は Stütze [支え]、それから Unterstützung [支持]、Beistand [援助]。比較: zur Steuer der Wahrheit [真実を支持するため]。さらに特殊な意味で [金銭、財物による支持] を意味し、最後に国家、公共団体を支えるための租税となった。

er schreibt eine schöne Hand. [彼はきれいな字を書く]。

なお行為の表示がその行為に参加しているひとをあらわすことがある。Person [個人、人] は lat. persona から借用された。根原的には俳優がその役割に応じてそれをつけて舞台にて演技する面のことであったが、それから [役割]、[人品]、[風彩] の意味となり、最後に [個人] の意味となった。現今では制限されて [女] の意味においても用いられる。so eine schlechte Person [こんな悪い奴(女)]。

最後に簡単に言及されるものは、一回の偶然的使用が一般的に有効な使用へと移り、これが決定的役割となった一つの語群、すなわち固有名詞である。あるひとに kurz, schwarz, groß などのあだ名がつけられたとき、このあだ名は無論当初には特定の場合のみしか通用しなかった。これが時日の経過するうちに型にはまり、一般化して家族名となるにいたった。例. Hans Kurz. これとおなじことが職業名、階級名にもあてはまる。職業名: Bäcker, Müller, Schneider, Schmidt, Schuster … 例. Manfred Schneider.

階級名: König, Kaiser, Papst, Ritter … 例. Robert Koenig.

階級名は明らかに当初には冗談めいてあるひとに呼ばれたものであった。

呼び名も意味を持っていた。例. Friedrich (= Friede und Reich). Theodrich = Volks-könig [人民の王]。

年月の経過につれて言語がさらに発展していくうちにこの意味を持った事実が忘れ去られて固有名詞は固着してしまった。

Neustadt, Mühlberg, Münden, Hof のように多くの地名は本来、その土地に居住していたひとびとをあらわしたものでしかなかった。それが交通の便がよくなり、往来が頻繁となって遠国のひとびともこれを取りあげ、使用しはじめて真の固有名詞となった。要するに人名、地名も一種の意味の変遷を経験したのである。

主 な 参 考 文 献

- O. Behaghel, Die deutsche Sprache. Abschnitt II. die Wandlungen der Bedeutung.
- H. Hirt, Etymologie der neuhochdeutschen Sprache. XVII. Bedeutungswandel.
- F. Kaufmann, Deutsche Grammatik. Kurzgefasste Laut- und Formenlehre des Gotischen, Alt-, Mittel- und Neuhochdeutschen.
- H. Paul, Prinzipien der Sprachgeschichte. Kap. IV. Wandel der Wortbedeutung.
- H. Reimann, Vergnügliches Handbuch der deutschen Sprache.
- J. Stengel, Philosophie der Sprache.
- A. Waag, Bedeutungsentwicklung unseres Wortschatzes.
- E. Wellander, Studien zum Bedeutungswandel im Deutschen.
- W. Wundt, Völkerpsychologie. II. Die Sprache. Der Bedeutungswandel.